巻頭言

工作部門長　喜多　英治

例年にたがわず今年も部門前の梅は見事に花を咲かせました。天候の変化にもあまり左右されず、そのペースを崩さないところは自然の力の大きさを感じます。

例年通りに季節が移りゆく中、大きなうねりが大学にも押し寄せています。筑波大学が設置されたのは1973年ですが、その年の秋には第一次オイルショックが起こりました。その後も何度かの好景気と不景気を経験してきました。2008年のリーマンショックでも、直前までは好景気に沸いていましたが、未曾有の世界的不況となってしまいました。空前の好景気だと舞い上がっていて不景気でどん底に落ちるのは、毎度のことながら避けられない事態のようです。

これまでの不景気は工業力などをたよりとして克服してきました。第一次オイルショックの折の就職難にもかなり深刻なものでしたが、幸いなことに当時成長を始めたばかりの情報産業が多くの若人を吸収し、産業が大きく発展するきっかけとなりました。

景気の低迷は多少緩和されてきたように伝えられていますが、大学生の就職率はいまだに回復していないと報道されています。表面的には、限られた世代だけが恵まれない不幸な事態にみえますが、冷静に見てみると日本の置かれている状況は、好況時でさえ予断を許さないもとなっています。日本が誇ったものつくりの力は世界中が相手のコスト競争に翻弄され、形を変えて新たに構築される必要があるようです。単純な加工や製造ではなく、使い勝手と材料を知り尽くした上での設計と組み合わさってこそ、「ものつくりの力」が発展していくのだと思います。学生が習得すべきものつくりとは、単純な工作技術ではなくそこに集積されたエッセンスとその特徴をいかに生かすかまでを考える総合的な力でしょう。

この２年間、工作部門ではこれまで研究支援を前面に業務に励んできた体制を、意識的に教育部門に広げてきました。若い世代が「ものつくり」をうまく消化して、科学技術の発展につなげてほしいものです。大学や工作部門をとりまく環境が変化する中、工作部門の役割も変化し成長していく必要を感じます。積極的に若い世代をサポートすることが部門の新しい役目となるでしょう。